

視 点

「序詞」二つ

駒 木 敏

万葉集の序詞形式の歌一首を掲げる。

ますらをのさつ矢たばさみ立ち向かひ射るままた的形は見るにさ
やけし(巻一・61、舍人娘子)

大宝二年、持統太上天皇の参河行幸時の、伊勢国的形浦での作である。解釈にあたって序詞がどのように扱われているか、二つの注釈を引いてみよう。

。一首は序詞の部分に重心が置かれてあり、その言掛の興味も作の動機の一つではあるが、全く見もせぬ所を人傳に聞いて作った歌とは考へられぬ。意味上の説明はないが「見るにさやけし」の調子には、實感がなければ出来ない強い眞實がこめられて居る。(私注)

。五句のうち三句半までが序で、本意はたゞ「的形は見るにさやけし」だけであるが、それだけでは歌にならないので、序の中に示されてゐるますらをのさわやかな姿が、や

がて的形の浦の印象に似通ふものがあり……。 (注釈)

前者は下句にこめられた「実感」を強調し、後者はその「実感」だけでは「歌にならない」から序詞部の想が展開されたのだという。一見対照的であるが、実は、あまりに長い序詞とあまりに短かい本旨との関係の説明に苦心している点では、共通しているのである。

序詞はその長さからいえば、二句ないし三句に渡るものが数の上からは圧倒的に多いが、それらは普通本旨(の一部)を導くための序として、解釈に際しては重点がかげられず、△その○○のように▽、△その○○ではないが▽のような図式で置きかえられる傾向がある。大系本などは、強いて序詞部を取りあげないか括弧で括ってしまうかの方針をとっているようであるが、序詞表現を二義的に扱っていることでは同じである。例えば右の歌の口語訳は、「円方の地は見れば清々しく心地がよい」であって、それこそ歌にならないのである。

右の歌の場合、長い序詞部にのみ重点を置いて見るのも、逆に本旨部だけに主題、主意を読もうとするのも偏向であろう。

「的形」の語のマトを軸に展開する序詞の想と、「的形」の現実の地を目前にする情とが、むしろ均衡を保って一つの表現体をなしていると見るべきである。しかも、

。サヤケシは的形の印象を示すとともに、また的に命中した矢のさわやかな響きをも感じさせる。(小学館本)

の出色の読みが教えてくれるように、序詞部の想と本旨部の情はサヤケシの語によって、恰も矢の響きのごとく共鳴し、統合されているのである。

をとめらが織る機の上を真櫛もち擡上げたく嶋波の間ゆ見
ゆ (巻七・1233、古集)

この例なども同様であって、本旨重点主義の序詞観からは表現の機微は読めないであろう。これには前の歌ほどに序詞と本旨の連関性、緊密性はないかも知れない。が、タク、ソマの語からイメージされた娘子らが櫛で糸筋を整えながら機を織るという序詞部の想念と、そのたく嶋が波間に見えているという情とが交錯することのなかに、この歌の抒情性をみるべきであろう。また、この歌がいずれ羈旅における作であろうことを考えれば、タクの語を軸にくり広げられる想念の中心に女性の姿が据えられていることも、一つの必然なのである。

右にあげた用例は序詞形式の中でも長いものに属する。あまりに長い序詞は、さすがに「本旨をいわんがための序」ではかたづけられない。そこで用意される評価の一つは「言葉の遊び」というのである。言葉に遊ぶ精神が万葉集にはないなど

というつもりはないが、序歌の言語遊戯にもそのよってきたる理由はあらずである。

二首はともどもに、「見るにさやけし」「波の間ゆ見ゆ」の慣用的表現に示されるように、国讀め歌の発想の系列に属するものである。伝統的表現で讀えられる旅先の自然——それは、どんな景物でも、どんな地名でもかまわない、といったものではなかったであろう。これらの作歌事情にも、言語遊戯という以上に、一つの土地に新たな意義づけをすることによってそれを讚美してゆくという心意をみることができはしまいか。

「をとめらが」の歌のたく嶋には和名抄の出雲嶋根郡多久があてられ、それは出雲国風土記によれば、次のような起源譚をもっていた。

蛭蛸嶋、周一十八里一百歩。高三丈。古老傳云、出雲郡杖築御崎有_二蛭蛸_一、天羽々鷲掠持飛燕、止_三于此島_一。故曰_三蛭蛸嶋_一。今人猶誤_二たく嶋號_一耳。(鳥根郡の条)

風土記のたく嶋はこの命名の起源譚をもつことによって存在が確かに保証される。万葉集のたく嶋もまた、序詞部に展開される命名によって「波の間ゆ」見られるべき対象として強く定位される。もちろん神話的命名から文学的命名への転換が二者の間にはある。そしてこの転換が意図的なものであったか否か

(作者が風土記の伝えるような起源譚を知っていたかどうか) は知るすべもないが、見るに讃えるにふさわしい由緒としてたゞ嶋の新たなイメージを構えているのがこの序詞部なのだといえるであろう。「ますらをの」の歌の方も仙覚抄に「マトカタハ、伊勢国也。風土記云。的形浦者、此浦地形、似的。因以爲名也。今已諸化成」(巻二)と引く類の地名伝承と関係をもつのであろうが、序詞部がそれを超えて新たな命名たりえていることは明らかである。

地名の伝統性に依拠して国讀め歌が歌われる一方で、その伝統性をあえて転換させたり、新たなイメージを加えたりすることによって一つの地名(土地・景物)を讃え歌う方法も試みられていったと考えられる。以上の歌どもはそのような新しいイメージを荷う序詞表現が、伝統的情意句と結ばれることによって新たな表現性を得ているのでありこのような表現性によって、漸新な行幸従駕歌・羈旅歌の地平を拓いていったものといえると思う。

序詞(という命名じたいがそうなのだが)を本旨を導くための序だとする捉え方が、本旨(心情)中心の和歌観に根ざしていることはいうまでもない。長い序詞をもつ歌の場合こういっ

た和歌観に基づく解釈は、しばしば問題を露呈している。しかし、ことは序詞の長短にはかかわらない。普通の、しかも大多数の序詞形式の解釈において、おざなりの解が通用しているとしたら、むしろ問題は大きい。

すでに早く、土橋寛先生が序詞を物との関係で心を抒べる発想形式に由来する構造だと指摘されたこと(『古代歌謡論』)は貴重である。それを敷衍して「心物」表現の対応関係のなかに歌のイマジネーションを読みとり(鈴木日出男氏)、あるいは「寄物」序詞構造」に和歌の様式の本質にかかわるものを探る(増井元氏)など、新しい展開もみられる。が、一首一首に即して序詞が正当に位置づけられるには、まだ時間がいりそうである。

思えば、万葉集が正述心緒・寄物陳思・譬喩の分類を立てていることのなかに、あくまで物に執しながらではあるが、心に比重を置く和歌観が表明されていたのもあった。しかし、否むしろそれゆえにこそ、物の表現に託された心意やイメージを明確にすることが、万葉歌のより深い理解のためには重要なであろう。

「序詞」の命名の呪縛は、いまだに我々を強くとらえている。心しなければならぬ。